

[書 評]

Hiroki Matsuzawa

*Die Relationsontologie bei Meister Eckhart*

Augustinus – Werk und Wirkung, Band 7

Paderborn: Ferdinand Schöningh, 2018, pp. 158

ISBN: 978-3-506-78760-6, 156 × 15 × 236mm, € 49.90

---

菊 地 智

本書は著者松澤裕樹のテュービンゲン大学での学位論文であると伺っている。マイスター・エックハルトの思想の核心を「関係存在論」(*Relationsontologie*)という観点から捉えた論考である。20世紀ドイツの哲学者ハインリッヒ・ロムバッハ(Heinrich Rombach)が主著 *Substanz System Struktur* において展開している哲学史観、すなわち中世から近世にかけて存在論の伝統が「実体存在論」(*Substanzontologie*)から「機能存在論」(*Funktionenontologie*)へと転換したとする見方、とりわけニコラウス・クザーヌスにその功績を認める見方を修正し、エックハルトの思想がその点でクザーヌスに先行していることを、本書は示そうとしている。ロムバッハからすればクザーヌスの出現を準備したに過ぎないエックハルトにこそその功績が帰せられるべきである、というのが著者の見解である。加えて、ロムバッハが同書でエックハルトに触れた際に、存在の問題が中心的に論じられているラテン語によるその学問的著作ではなく、司牧的内容のドイツ語作品をもっぱら参照しているのは不備であるとし、本書は主として前者を参照している。

「関係存在論」という思想的立場を、本書は、ロムバッハが名付ける「機能存在論」の一形態としているが、ロムバッハ自身は、評者の瞥見したところでは、上記の著作で「関係存在論」という語を用いているわけではないようである。松澤が他の先行研究からこの語を導入したのかどうか、本書を読む限りでは定かではないが、松澤がエックハルトを「関係存在論」者と呼ぶ根拠としているのは、エックハルトがその作品の中でアリストテレスに由来する基本範疇のうち「実体」と「関係」の範疇を対照させている箇所である。「実体」は個々の事物の基体を指示するのに対して、それ以外の範疇である「質」や「量」などは、その基体の

特徴を指示するものである。しかしそれらの中で「関係」の範疇だけは、エックハルトによれば、基体そのもののみならず、基体と対立するものをも指示する。松澤は、エックハルトが、このような「関係」範疇を中心にした存在論を、その思想の最も重要な文脈のそれぞれに敷衍することによって、個々の事物を自律・自存するものとしてのみ捉える「実体存在論」を克服していると見なす。

エックハルトの思想におけるそうした最も重要な文脈として、本書は、「三位一体論」、「創造論」、「人間論」の三つを挙げ、それぞれのうちに「関係存在論」的構造を見出している。「三位一体論」を扱う第三章は、父と子の位格的関係についてのエックハルトの理解に注目する。エックハルトによれば、父と子の位格は互いに「他へ向かって在ること」(*Für-ein-anderes-Sein*)を本質としている。さらに、範型である父と、その像である子とのあいだの神性の授受は、一なる神の自己認識に他ならない。「創造論」を扱う第四章は、神と被造物の関係についてのエックハルトの理解に焦点を当てる。エックハルトによれば、一方で神は孤絶して存在するのではなく、存在を絶え間なく与えることによって被造物のうちであり、他方で被造物はそれ自体無であるゆえ、絶え間なく神から存在を受けつつ、神のうちに存在する。両者はそれぞれ別個に且つ静的に存在するのではなく、不断の相互内に関係のうちにある。「人間論」を扱う第五章は、人間存在のうちでとりわけ「知性」が、神の像である子＝キリストへ向けて作られたと見なすエックハルトの理解に目を向ける。神は自己の像（である子）において自己と一切の被造物とを認識するが、人間の知性もまた自らがそれへと向けて作られた神の像を介して、本来の自己と神とそして一切の被造物とを認識する。人間知性によるこうした自己認識、神認識、被造物認識は、神の像である子＝キリストへと一致することであり、そのこと自体が実は神の自己認識・被造物認識に他ならない。なお「人間論」を扱うこの章では、墮罪によって隠されているそのような人間知性の本来のあり方を取り戻す道を教えるエックハルトの司牧的な教説も、「関係存在論」的に再考されている。すなわちそのような教説は、人間を善なる神に一致させる聖霊による「同化の恩寵」(*Gnade der Verähnlichung*)と、善なる神へと向かう人間による徳（とりわけ謙虚の徳）との「協働」を、一貫して説いているという。

このように本書は、エックハルトという一人の思想家の思弁を「関係存在論」という一つの観点からきわめて明瞭に再構成しており、ラテン語作品からの引用を数多く交えた論証も緻密である。ただし、思想史的な考察は（松澤によれば依然として「実体存在論」の枠内に留まっているところの）アウグスティヌスやトマス・アクィナスを、エックハルトとの比較のために散発的に引いているのにほぼ限られており、それは「関係存在論」という観点から見たエックハルトの思想史上の独自性を十分に解明するには足りない（もっとも松澤は、ロムバツハの

哲学史観を踏襲したうえで、ロムバッハがクザヌスに認めた独自性をエックハルトに帰することをもって思想史的考察は足れりとしているのかもしれないが。付け加えると、ロムバッハの哲学史観を部分的に修正するという意図を除けば、松澤は、自身の論考が中世思想研究史に対して有する意義、とりわけエックハルト研究史に対して有する意義がどのようなものであるかについて、表明していない。これらの点についての評価は、もっぱら読者に委ねられていることになる。

評者自身は、中世キリスト教神秘思想への教会史的アプローチが専門であるので、本書の哲学的アプローチの意義について適切に評価するのが心許ない。各章の哲学的論証を漏れなく把握しえたとも言い難い。しかし敢えて教会史的立場から見るならば、本書は、エックハルトの思想が教会によって異端断罪された出来事の歴史の意味について再考を促す有意義な知見を示しているように思われる。私見では、キリスト教の世界観は、端緒より甚だ「関係存在論」的である（そのように言う以上は、西洋の存在論がようやく中世から近世にかけて「実体存在論」を脱したとするロムバッハの哲学史観の正否から検討しなくてはならないが、ここでは控えたい）。キリスト教の核心的教義である三位一体論は、教父たちによって古代の教義成立期にまさしく「関係存在論」的に説明されてはいないだろうか。父は子に対するかぎりて父であり、子は父に対するかぎりて子であり、聖霊は父と子から（ないし、子を介して）発出するかぎりて聖霊であるとする「対他性」が、教父たちによれば三位一体の基本構造である。また、キリスト教の創造論も（それが由来するユダヤ教のと同じく）、本来からして、万物を永遠から存在するものとしてではなく、自ずから生成するものとしてでもなく、創造者である神との関係のうちにあるものとして捉えている。被造物の中でもとりわけ「神にかたどり、神に似せて作られた」（創世記 1:25 参照）人間にとっては、神との関係が実存そのものである。しかもキリスト教においては、罪によって損なわれた人間のこの実存が、イエス・キリストの受肉によって回復されたという救済史観が加わる。キリスト教にとって神との関係は、神話のないし哲学的観念にとどまるものではなく、この時間のうちで現事実として具体的に示されている。ところで、こうしたキリスト教の基本教義が生成・発展する過程で、神と被造物をそれぞれ「実体的」に捉えようとする立場が繰り返し現れた。古代のサベリウス派やアリウス派などの異端は、キリストは神であり人である、もしくは神は一にして三であるとする信仰の不合理（絶合理・超合理と言うべきか）を解消すべく、キリストに神性もしくは人性の一方のみを認め、神と被造物とをそれぞれ別個に自律したものとして見なす立場であった。それらの立場を教会がそのつど退けたのは、結局、神と被造物との関係、すなわち生きた交流を、信仰の要として保持しようとしたからに他ならない。その後も中世にかけて、ギリシャ思想、特に個々の事物の実体的存在を主張するアリストテレス哲学との対峙や、一切の被造

物を神と見なす汎神論的異端の出現などを経験し、教会はそのたびに自らが抱って立つ「関係性」というアイデンティティの確認を迫られたはずである。そうした歴史を経て、エックハルトの思想が教会から異端として排斥されたことは、もし、本書が見なすように、彼の立場が「関係存在論」に徹したものであったとすれば、教会史的にいか理解すべき事柄であるのか。

本書が、エックハルトの「創造論」を扱う第四章の一節を、エックハルトに対する異端審問の史料の分析に割いているのは、そうした歴史的関心からして興味深い。エックハルトの教説は、当時アヴィニオンにあった教皇庁で、思想家の死後に異端断罪されるが、エックハルトは生前、教皇の編成した審問委員会へ向けて、自分の作品から抜き出された文言それぞれについて弁明をしている。その弁明は、それに対する審問委員会の神学者たちの応酬とともに、『アヴィニオンの神学者たちによる鑑定』(*Votum theologorum Avenionensium*) と呼ばれる文書に記録され、今日に残されている。エックハルトと教会との対立が、神学的立場上どこに存していたのかが窺える、貴重な史料である。本書は、その史料の中で、創造論についてのエックハルトの見解をめぐる議論を分析して、エックハルトと審問委員会との対立を、まさしく「関係存在論」と「実体存在論」の対立として捉えている。松澤によれば、神学者たちは、万物と神とをそれぞれ独立自存する実体として理解しており、エックハルトの「関係存在論」の立場を適切に評価できなかったとのことである。

これは精神史の断面を切り取る有意義な指摘であると思う。これが事実なら、教会側はこのとき本来の「関係性」の立場を喪失していたということであろうか。それならば、エックハルトと神学者たちとのあいだの「関係存在論」と「実体存在論」を軸とする対立は、創造論以外の点においては認められないであろうか。全部で28を数える断罪されたエックハルトの文言の中には、三位一体や、人間の神的子性 (*filialio*) についての見解を述べたものも含まれている（本書は三位一体論と人間論とを扱った以上、それらの文言をめぐる議論も検証する必要があるのではないか）。私見によれば、人間の神的子性についてのエックハルトの考えをめぐる議論では、やはり同様の対立を見出すことができる。人間と、神の独り子であるキリストとを同一視するかのようなエックハルトの文言がいくつか断罪されているが、神学者たちはそれを、個々の人間が、実在したキリストのように処女から生まれ、奇跡を行い、死後復活するようになることを述べていると受け止めている。つまり、或る実体（基体）としての人格が、他の人格に変化することをエックハルトが説いていると解しているのである。それに対してエックハルトは、こうした文言によって、一人一人の人間がただ一つの神的子性に参与することを言おうとしているのだと弁明している。言い換えれば、キリストを介して神との本来の関係を回復する道を説こうとしたのである。ところが他方、

三位一体論に関しては、エックハルトと神学者たちとのあいだの立場は、「関係存在論」と「実体存在論」の対立を軸にして見ると、少なくとも『鑑定書』を読む限りでは、むしろ逆転している。「(神的) 本性においてであれ、位格においてであれ、いかなる区別も神には存在しない」といったエックハルトの文言をめぐって議論されているが、神学者たちは、神性が一なるものであるからと言って位格のあいだの対立する関係 (*oppositae relationes*) まで否定されてはならないとして、「関係存在論」的立場からこれらの文言を退けている。それに対してエックハルトは、三つの位格は唯一の神であるが、互いに相手から関係的・対他的に (*ab opposito relative*) 区別されると言って反論しているが、これでは神学者たちが述べていることとほとんど変わりなく、弁明になっているとは言えない。むしろ、神に一切の区別を認めない上記の断罪された文言に見られる、少なくとも言葉のうえでは「非・関係存在論」的に響く見解の方が際立つようである。ひいては「三位を突破して神性において神を把握する」というエックハルトのよく知られたドイツ語の教説と、彼の「関係存在論」的三位一体論との関連はいかに理解すればよいのか、あらためて疑問が湧く。「関係存在論」的三位一体論は、エックハルトにとって、さらに乗り越えるべき立場であったのだろうか。それとも、彼はさらに高次の関係性を神の中に認めていたのであろうか。また、このときの教会側の神学的立場は「関係性」の伝統をどれほど汲んだものだったのであろうか。それらの疑問に対する解答を得るには詳しい検証が必要であらうが、エックハルトと教会との関係、異端と正統との関係は、「関係存在論」の観点から見ると、広範に及んでしかも入り組んだ問題を有しているようである。

付け加えると、人間の救済にとっての外的な行為の意義を認めないエックハルトの教説も、同じ機会に教会から排斥されているが、これはひいては教会の行う秘跡、さらには人間と神とを媒介する教会そのものの存在意義に関わる問題である。エックハルトは、人間と人間とのあいだの関係を、それぞれ神を直接に介した垂直的な関係として見ていたとすれば、そのような「関係存在論」的立場からすると、制度としての「教会」はいかに理解されるのであろうか。

本書の示す知見は明快であるだけに、この書評が触れた教会史的な問題のみならず、様々な根本的な問題を、読者それぞれのアプローチに応じて、さらに浮き彫りにするかもしれない。一読をお薦めしたい。